



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	シンポジウム総合討論 (地理教育シンポジウム) (fulltext)
Author(s)	
Citation	学芸地理(68): 42-46
Issue Date	2013-07-31
URL	http://hdl.handle.net/2309/134219
Publisher	東京学芸大学地理学会
Rights	

シンポジウム総合討論

座長 竹内 裕一*

座長：堀内先生の講演をうけて、3つの実践報告をしていただきました。そして吉田和義先生には実践報告をうけたコメントをいただきました。これからの時間は、今までの発表を踏まえて、議論を深めたいと思います。その取り掛かりとして、堀内先生が配布していただいた資料に現代の地理教育をめぐる諸課題として、3つの課題を指摘してくださっております。できればこれをを窓口にしながら議論を深めていきたいと思います。まず、一つ目の学習内容と学習方法から焦点を当てて議論できたらと思います。先程鉄川先生の実践報告にもございましたように、地理学の成果をどのように中高一貫カリキュラムの中に導入し、組み立てていくのか、かなり斬新なカリキュラムを実践しています。また、堀内先生が指摘したように、教師の指導力の向上に、専門性のもった幅広い教養のある教師の育成が必要だということもございます。どのように地理学と地理教育の関係を保っていけばいいのかを考えていく必要があるという指摘だと思います。ご意見いかがでしょうか。

佐島群巳（学芸大名誉教授、1期）：大屋先生と鉄川先生の内容に共通していることで、鉄川先生は大学受験のことを想定しながらもおかつ「自分で考え、判断する」生徒の育成を目指すという発言がありました。大屋先生は、この子たちに何を期待し、何を与え、成長させたいかという生徒の側にたった発言がありました。その中で「私はこうやりたいけどあまり実

行できない」とおっしゃっていましたが、本当にやったらどうですか。重要なことは教育が迷っているのは先生が迷っているせいだと思います。1987（昭和62）年、中教審の方針の中に自己教育力の育成が言われています。自己教育力とは生涯にわたって社会の変化に対応する態度、能力、学び方、学習意欲であるといっています。それは実務的な知識を与えるということではありません。堀内先生が関わった中教審の答申でも生きる力で説明されているように、自ら考え、判断する、問題解決能力を育成する、これは生涯にわたって身に付ける能力です。今日の報告では自ら考える生徒を育成するという願いがあるのならばもっと学習内容やカリキュラムを変えなければいけない。教育に悩みながらやっている大屋先生の将来に期待します。別の方は手段的目標だと思います。私は自己実現的目標でなかったら教育がつぶれてしまうと思います。今日はいい発表をされたのでぜひこのところを考えていただきたい。

鉄川敬史（報告者）：私は卒業してから私立学校勤務ですので異動がありません。その分卒業生たちとの付き合いが長く、遊びに来てくれます。外交官になった生徒や企業に勤めている生徒が「先生の授業を覚えている」という報告をしてくれたりするのがとてもうれしく思います。私が中・高校の授業で話してきたことが、社会にでて彼らの考える1つの基盤として活用されています。すべての生徒ではありませんが、

* 千葉大学教育学部教授（院21期）

そういうことを聞くと、地理の学習が生涯にわたる知己を得たり、人生を2倍楽しくなってくれていると実感します。

座長：一見すると鉄川先生の授業は佐島先生のご指摘ですと、自己教育力や生きる力などという学習指導要領が標榜している学力とは齟齬があり、地理学の系統を教えていくカリキュラムになっていると思いますがいかがですか。

鉄川敬史：地誌学習につきましては高校1年の最後まで扱い、高校3年の段階で2時間の授業があります。結局、いろいろな知識を生徒たち自身が結びつけて、世界や地域で起きている様々なことに応えられるようにしたいと考えています。

座長：地理学を専門になさっている先生方がでしょうか。地理学と地理教育をどういった関係性でとりあげていくかご意見がございませうか。

立川和平（海城中・高、40期）：私の勤務する学校も私立の一貫校です。一応申し上げておきますと私の勤務校では世界地誌を履修させております。さて、地理学と地理教育という関係で、発表中にご発言があったことについて確認します。チューネンの農業立地論を扱うときに、経済人の概念については捨象しているというお話がありました。そこに少し違和感があります。本来であれば、なんでこういう理論がでてくるんだろう、あるいはどのように現実にあてはめたらいいのかを考えるようにすべきではないでしょうか。一番大事なところを削って、チューネンが出している形式的な手続きの話だけになってしまう、技術的な話だけになってしまうことに違和感をもったのですがいかがですか。

鉄川敬史：経済人、満足人といった考え方の話をせずに、すべて同じようなことを考えますということで用語は捨象したということですが、概念としての経済人という言葉は教えなかった

ということですが、

立川和平：チューネンは高等学校の内容で取り上げられますので、私も授業で扱いますがこんなに細かくは教えていません。チューネンは一般的にはかなりいろんなことを捨象していますので、大雑把にこうした原理があるということではできますが、むしろホイットルサーの農業地域区分がどうなっているのかということのほうが、現実社会との理解あるいは生徒の理解という関係性において高等学校レベルの教材としてふさわしいのかなと思います。それはホイットルサーのほうが多角的な原理を組み込んでできていると思うからです。それはそれとして、佐島先生が提議なさっている生徒が自分で考えたり、疑問に思ったり、それを客観的に判断できるようになったりするためのツールとして、何がふさわしいのかというところをもう少し整理した方がよいと思いました。

古田悦造（教員）：チューネンの話が出てきたので関連して質問します。私も大学1年生対象の「日本研究基礎論」という科目で理念としてのチューネンの孤立国の講義をします。ある時間は農業でチューネンの話をして、次の時間は言語で方言圏論の話をして、そのまた次の時間は都市の内部構造でバージェスの同心円構造の話をして、ほかの都市の内部構造の話もしますが、基本的に学生たちがただそれを覚えるのではなく、距離の概念というか、中心からの距離によってどれも同心円になっていると、それが地理的見方・考え方の1つだと授業をしめくります。ちょっとちがうかもわかりませんが、私はそういうふうに地理的見方・考え方を教える手段としてチューネンや方言圏論、バージェスの同心円構造を教えています。小学校、中学校、高校どこであろうが地理的見方考え方を教えるそれをどういう教材で教えるかが問題で、地理的見方・考え方を習得してもら

のが1番かなと、私は大学生を教えるときにそのようなつもりで教えています。

座長：そうすると、小学校、中学校、高校でも地理の見方・考え方を軸に教えていったほうがいいというお考えですか。

古田悦造（教員）：少なくとも大学で教えているものですから、地理学を専門にしている方ではどうですかということで座長が発言されたような気がしたので、大学で中学校社会科、高校地歴の免許を取るときに、地理の見方・考え方とはこうだよということを、教科教育法の授業ではないですけど、教えると多少地理が好きな児童・生徒を教えてもらえるかなと思ってそういう立場で授業をやっていますということを報告しただけです。

石田典行（学芸大非常勤教員，18期）：高校の教員を少し前に退職しましたが、大屋先生の話の伺い、かつて散々悩まされたことを思い返しました。私も都立高校にいた時、入学成績でいうとかなり低い高校に勤めておりました。そこでは地理の授業がどうのこうのではなく、学校教員としてどのように生徒と関わっていくべきかと大変悩まされました。生徒自身はとてもエネルギーで主体的に行動します。例えば私が卒業させた生徒で専門学校に入れなかった生徒がいました。写真の仕事をやりたいという希望を強く持っていましたが、日本の専門学校は入れてくれないのです。そこでアメリカの私立大学で5年間勉強したのです。生徒はこういうエネルギーを持っているのです。私は学芸大学を卒業しましたが、残念なことにこんな生徒への対応の仕方というもの、今まで一度も習ったことはありませんでした。だから、現場に出ると四苦八苦することになります。先日、別の機会で筑波大学附属高校の先生の話の伺いました。大学受験とは関係のない話をしても、生徒は楽しく聞いてくれるというのです。とて

もうらやましく思いました。私がある都立高校で教えていた時は、まずはセンター試験や大学の試験に合格するのが先で、授業が面白いかではなく、試験に出る内容をきちんと教えるということをはっきり要求されました。そして大学に入った生徒から話を聞くと、高校でやった内容は全部忘れたというのです。正直、学芸大学の学生の話聞く限りでは、高校社会科の授業はだいたい穴埋めや講義が中心でつまらなく、寝ていたという人が多いのです。また、講義の内容も後で誰かのノートをコピーしてしまえば全く問題がないのです。それが今の高校の実態だと思うのです。

学習指導要領が改訂され、教員は主体的に新しいカリキュラムと授業内容を持ちながら生徒に関わっていきなさいといわれても、具体的にどのように取り組んでいくべきなのか悩んでいるのではないかと思います。大学の先生がもう少し手伝ってくれないと現場の先生も大変ではないかと思います。

高校を卒業してすぐに社会に出る生徒、学力の点で大学にいけないような生徒、そして受験に苦しむ中間層の生徒に対し、地理学習、本日のテーマである動態的地誌学が将来の生き方にどのような意味をもってくるのかをはっきりさせられればと思います。そうすることによって生徒も地理学習に付いてきてくれるようになるのではと思います。

座長：ありがとうございます。

上野和彦（教員）：私は大学院修了後、都立のA商業高等学校に勤めました。生徒たちは下町独特の明るさを持って活動的ですが、学力的には不十分なままの生徒が多かったです。私も若く、その指導力は未熟な段階でしたが、生徒たちの学力不足に嘆かず、泣き言は言わないと決めました。そしてどんな学力であろうが、どんな学校であろうが、生徒自身が「自分の置か

れている状況を理解し、行動する」ことを教育の目標としました。地理の授業においてもそれは同じです。A商業高校での地理授業は、身近な地域の学習に力を入れました。自分たちの地域の中で「自分たちがどういう立場にいるのか」を考えさせました。それをだんだん広げて日本や世界の学習の中で自分を位置づける学習につながりました。アメリカ合衆国の学習にしても、自分を理解するためにアメリカを理解し、同時に日本と比較しながら、日本の中での自分の立場を生徒に理解させたいと考えていました。

現在、私の大学における担当はアジア研究です。アジア諸国、とくに中国社会の仕組みを学びながら、それが進学や就職先を考える素材となるよう努力しています。

座長からも指摘がありましたように、今日の地理の学習内容はあまりにも多岐に渡りすぎています。どういう素材をどのような順序で提供できるのか、もう少し議論されるべきであると思います。今日の地理学習が「子どもたちの未来、将来と自立」という教育的視点からの教材の整理の視点が欠落し、結局、羅列的学習に陥ってしまうのです。地域の変化を自分との関わり合いのなかで考え、自分や家族などへのフィードバックをする作業が、今の中学校や高等学校の学習には足りていないのだと思います。そのような自己確立のための学習プログラムを地理学習のなかに入れ込んでいかなければならないと考えます。

座長：自己理解をめざした地理教育を確立させるための学習内容の選択と、それを小中高の系統性や発展性にどう被せていくのが重要であるという指摘でした。それに対してコメントの吉田先生からは、地誌学習において、まず基礎的な世界像を形成することから始め、自国を中心とした地誌、あるいは多極的な地誌学習を組んでいくべきだご提案をいただきま

した。そのなかで、自己理解を中核にする地理学習の必要性がご提案されました。それに関しはいかがでしょうか。

宮地忠明（国立音大、15期）：私の感想を言わせていただきます。まず大屋先生はいい経験をしていると私は思います。私も定時制の高校でこういう経験をしました。そういう生徒たちに、どのように学ぶ姿勢を作らせるか、なぜこの生徒たちは何も知らないのかということを考えました。その前がどうだったのかをみまると、どこで路線が曲がってしまったかがわかります。それを回復してあげるのが教師の役目であるという教育観を私は持っております。そういうなかで、学習の内容ということがありましたが、小学校の地理にはアフリカがなく、音楽で出てくる、これは重要なことではないでしょうか。私も音楽大学に勤めておりまして、学生を教える立場ではないのですが、教えていた時、よく言っていたことがあります。音楽は地域のことをやっているのですが、その地域のことを知らないで音楽を教えることができるのかということです。この曲の背景は何なのか、その時代はどのような時代なのか、それを理解しなくてはならないのです。私が指導主事をやっていたとき、ある小学校の音楽の授業を見に行きました。そこではハンガリーの音楽をやっていたのですが、先生は生徒に曲を聞かせて「どう？この曲は暗いでしょう」と言ったのです。私は大学院でハンガリーの地誌も学びましたが、ハンガリーが暗いなんてことはないのです。ハンガリーはバロック音楽を中心にもっと明るいのです。しかし、音楽の先生はすでにハンガリーは暗いという地域観を持ってしまっていたのです。そういうことは他の学校でも起こっているでしょう。そのため、先生方はもっと地理的な見方・考え方を持たなくてはならず、そういうものを作り上げることが私たちに残された義務

であると考えられます。これは学芸地理の役割でもあると思います。それともう一つ、では地理とは何なのか、ということです。私は距離だと思のです。距離は面積にもなりますので。東京都の日本史の教科書が作られた時、私のところにできたものが届いたのですが、「これは何を作ったの?」という内容のものでした。私は世界史の教科書の審査員などもやりましたが、必ず縮尺を入れろと言っています。先ほど言った距離です。そして、新しい教科書には全部距離が入りました。つまり、私たちのような地理をやるものはそういう感覚をもっているのです。結局、距離とは場のことであります。場があって、それが高さや位置になります。ですから、距離が中心になっているのが地理の根本だと思のです。教える対象が小中高どの段階であっても、その視点を失わないで教材を捉えなければならぬのです。鉄川さんの学校は私立なので、私たち公立からみると違和感がありますが、それはその学校のスタイルで、そのなかで、先ほど述べたような地理の根幹が忘れられてしまうのならそれは意味がなくなってしまう。そのことを考えなければならぬと思しながら話を聞いておりました。そういうなかで、どう授業を進めていくか、今日の内容は三者三様で、素晴らしい問題提起をしてくれたのではないかと思います。

堀内一男：3つの発表ありがとうございます。それとは少し離れてしましますが、一言お話ししておかなければならないことがあります。地誌の見方が地理学の中心であり、中学生は中学校で初めて地誌を学ぶことになります。九州やヨーロッパの内容は小学校では一切扱われません。そこでどういう地誌をやらなければいけないのかということは我々の課題であり、学習指導要領の昭和52年版までは金太郎飴的に自然環境や都市、農業や工業についてやって

いればよかったのです。しかし、そういった地誌でいいのかと議論になり、それが平成元年から変わってきました。我々が、どのように地誌というものを精選し、中学生に必要なイメージを持たせていくかということについて、主題を設けることによって精選ができるのではないかと思わけです。その主題は場所によってなるべく違ったものを設けることが重要になります。では初めて学ぶ日本はどうするかという点に関しては、そこに動態地誌という言葉がでてきて、大変な問題になっています。実は、動態地誌という言葉は学習指導要領の本文にはありません。説明のところ初めて出てくるのです。本文では「地域の特色ある事象やことがらを中核として、それを他の事象と有機的に関連付けて、地域的特色を追究するようにすること」と書いてあり、これが狙いなのです。要するに、内容を精選し、その地域にふさわしいことを重点的に取り上げてください、ということなのです。ここで、動態地誌という言葉遣うとわかりやすいと考えられ、解説の中で数回出てくるのです。これまでは、動態地誌という言葉を出すことはやめようという流れできたのですが、最後にわかりやすくするために入れられたのです。そして、その言葉が独り歩きしてしまっているのが今の実態なのです。だから、狙っているところは少し違うというところを皆さんにご承知いただければと思います。

座長：時間の関係で終わらなくてはなりません。宮地先生、堀内先生のお話で今日の60周年シンポジウムのまとめになったのではないかと思います。地理教育の目指す狙いのところをしっかりとっておけば、やり方はいろいろとあるということでした。学校の状況に応じた地理教育をこれからも目指していければと思います。そして、学芸地理学会がその先頭に立って情報発信をしていく必要があるかと思います。